

小・中・高等学校等に在籍する弱視等児童生徒に係る調査の結果について

- 1 本調査は、すべての小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在籍する弱視等児童生徒の実態（在籍者数、学校として主に使用することが望ましいと判断している教科書の種別）及び点字教科書・拡大教科書を使用していない理由を、9月1日現在で取りまとめたものである。
- 2 本調査における「弱視等児童生徒」とは、視覚障害により「眼鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が困難な程度のもの（点字教科書使用者を含む。）」とし、現に点字教科書又は拡大教科書を使用・希望するなど、学校において弱視等児童生徒として把握している場合も対象とした。
- 3 各学校において把握している弱視等児童生徒数は小学校段階では 3,449 人、中学校段階では 1,541 人、高等学校段階では 1,835 人、総計で 6,825 人であった。
また、当該児童生徒に関し、学校として主に使用することが望ましいと判断している教科書の種別ごとに見ると、点字教科書を使用することが望ましいと判断されている児童生徒数は 419 人、拡大教科書は 2,087 人、通常の検定教科書は 2,277 人、絵本等の一般図書は 2,042 人であった。
※ 絵本等の一般図書とは、学校教育法附則第9条に規定する教科用図書（通常の検定教科書や文部科学省著作教科書以外のもの）を指す。
- 4 点字教科書・拡大教科書を使用していない理由としては、「本人・保護者が使用を希望していないため」、「拡大教科書の存在を知らなかった、又は拡大教科書が発行されているかどうか分からなかったため」などが多かった。

調査結果

○ 弱視等児童生徒の実態

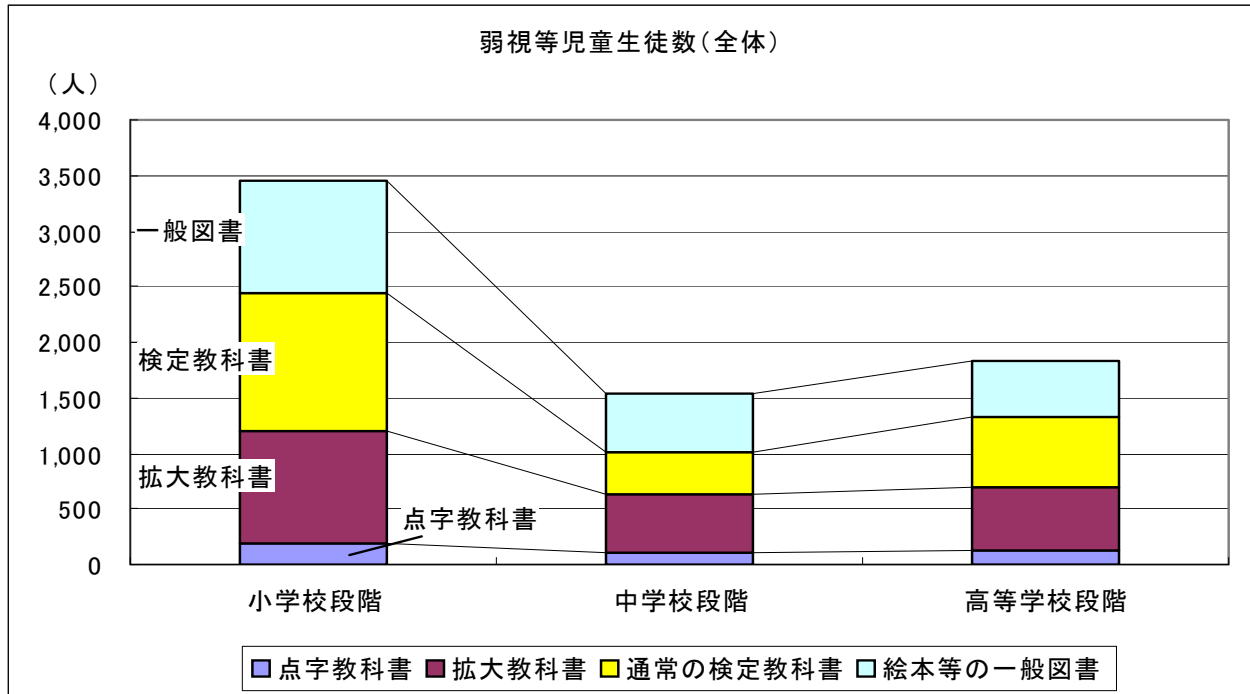
(1) 全体

〔表 1〕

在籍	弱視等 児童生徒数	学校として主に使用することが望ましいと 判断している教科書の種別			
		点字教科書	拡大教科書	通常の 検定教科書	絵本等の 一般図書
小学校段階	3,449	186 (5.4)	1,009 (29.3)	1,254 (36.4)	1,000 (29.0)
中学校段階	1,541	109 (7.1)	516 (33.5)	382 (24.8)	534 (34.7)
高等学校段階	1,835	124 (6.8)	562 (30.6)	641 (34.9)	508 (27.7)
合計	6,825	419 (6.1)	2,087 (30.6)	2,277 (33.4)	2,042 (29.9)

※ () は在籍ごとの弱視等児童生徒数に対する割合。四捨五入の関係で合計が100にならない場合がある。

〔図 1〕



- ・ 小学校段階では、通常の検定教科書を使用することが望ましい児童の割合が多い。
- ・ 中学校段階から高等学校段階にかけて弱視等生徒の数が増加している。また、通常の検定教科書を使用することが望ましい生徒の割合が増加している。

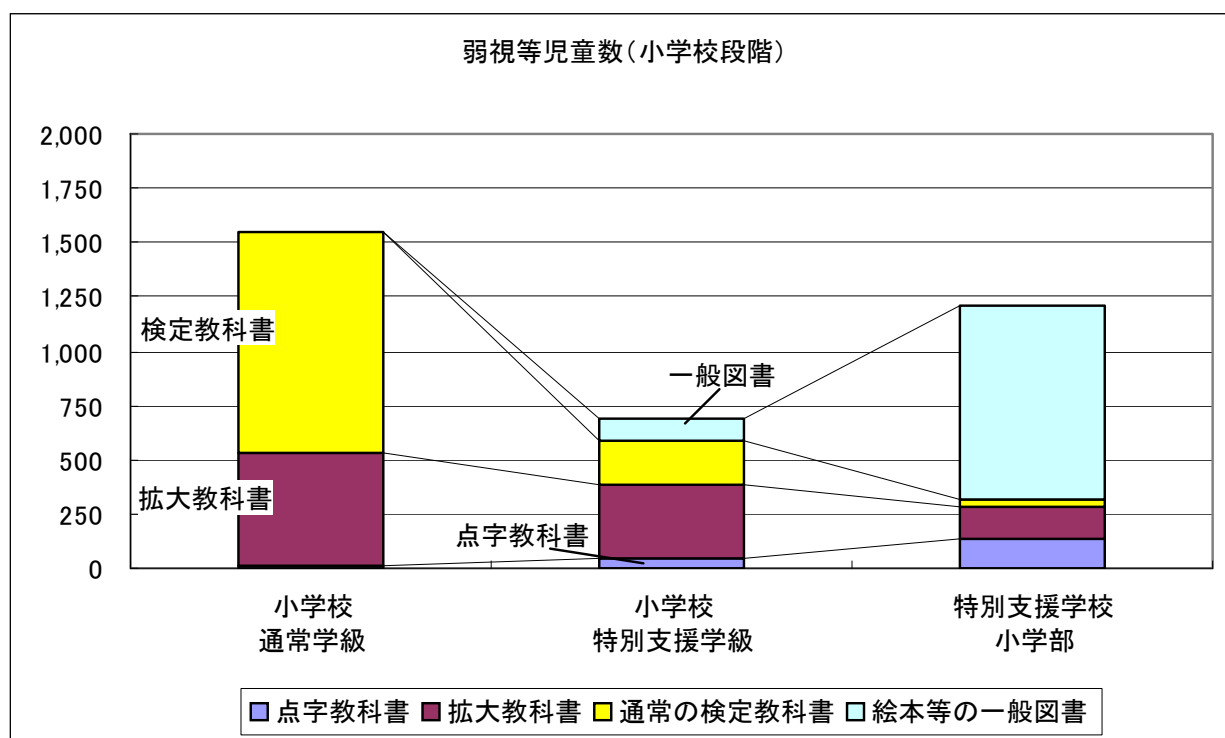
(2) 小学校段階

[表 2]

在籍	弱視等 児童数	学校として主に使用することが望ましいと 判断している教科書の種別			
		点字教科書	拡大教科書	通常の 検定教科書	絵本等の 一般図書
小学校・通常学級	1,547	8 (0.5)	522 (33.7)	1,017 (65.7)	- (-)
小学校・特別支援学級	693	40 (5.8)	344 (49.6)	202 (29.1)	107 (15.4)
特別支援学校・小学部	1,209	138 (11.4)	143 (11.8)	35 (2.9)	893 (73.9)
合計	3,449	186 (5.4)	1,009 (29.3)	1,254 (36.4)	1,000 (29.0)

※ ()は在籍ごとの弱視等児童数に対する割合。四捨五入の関係で合計が 100 にならない場合がある。

[図 2]



- ・ 小学校の通常学級に在籍する弱視等児童のうち3割程度、特別支援学級に在籍する弱視等児童のうち5割程度、特別支援学校小学部に在籍する弱視等児童のうち1割程度は拡大教科書の使用が望ましい児童である。
- ・ 特別支援学校小学部に在籍する弱視等児童のうち1割程度は点字教科書の使用が望ましい児童である。

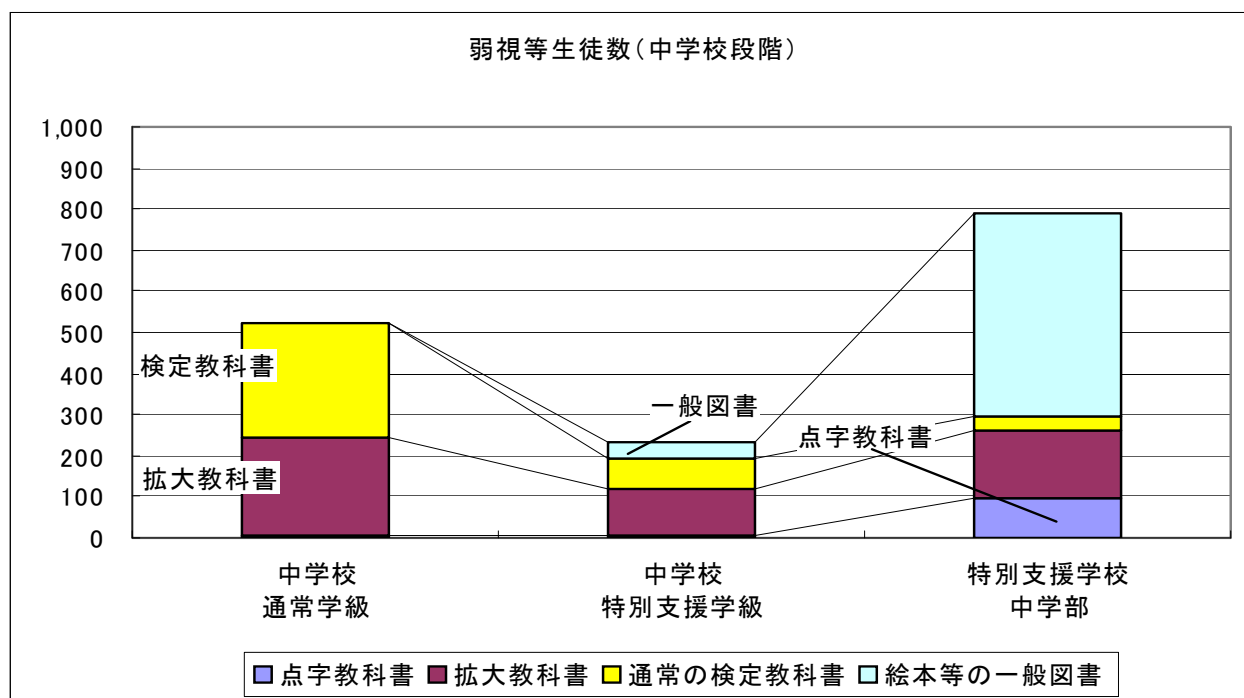
(3) 中学校段階

[表 3]

在籍	弱視等 生徒数	学校として主に使用することが望ましいと 判断している教科書の種別			
		点字教科書	拡大教科書	通常の 検定教科書	絵本等の 一般図書
中学校・通常学級	520	5 (1.0)	241 (46.3)	274 (52.7)	- (-)
中学校・特別支援学級	232	6 (2.6)	112 (48.3)	73 (31.5)	41 (17.7)
中等教育学校・前期課程	2	0 (0)	0 (0)	2 (100.0)	- (-)
特別支援学校・中学部	787	98 (12.5)	163 (20.7)	33 (4.2)	493 (62.6)
合計	1,541	109 (7.1)	516 (33.5)	382 (24.8)	534 (34.7)

※ ()は在籍ごとの弱視等生徒数に対する割合。四捨五入の関係で合計が 100 にならない場合がある。

[図 3]



- ・ 中学校の通常学級、特別支援学級に在籍する弱視等生徒のうち5割程度、特別支援学校中学部に在籍する弱視等生徒のうち2割程度は拡大教科書の使用が望ましい生徒である。
- ・ 特別支援学校中学部に在籍する弱視等生徒のうち1割程度は点字教科書の使用が望ましい生徒である。

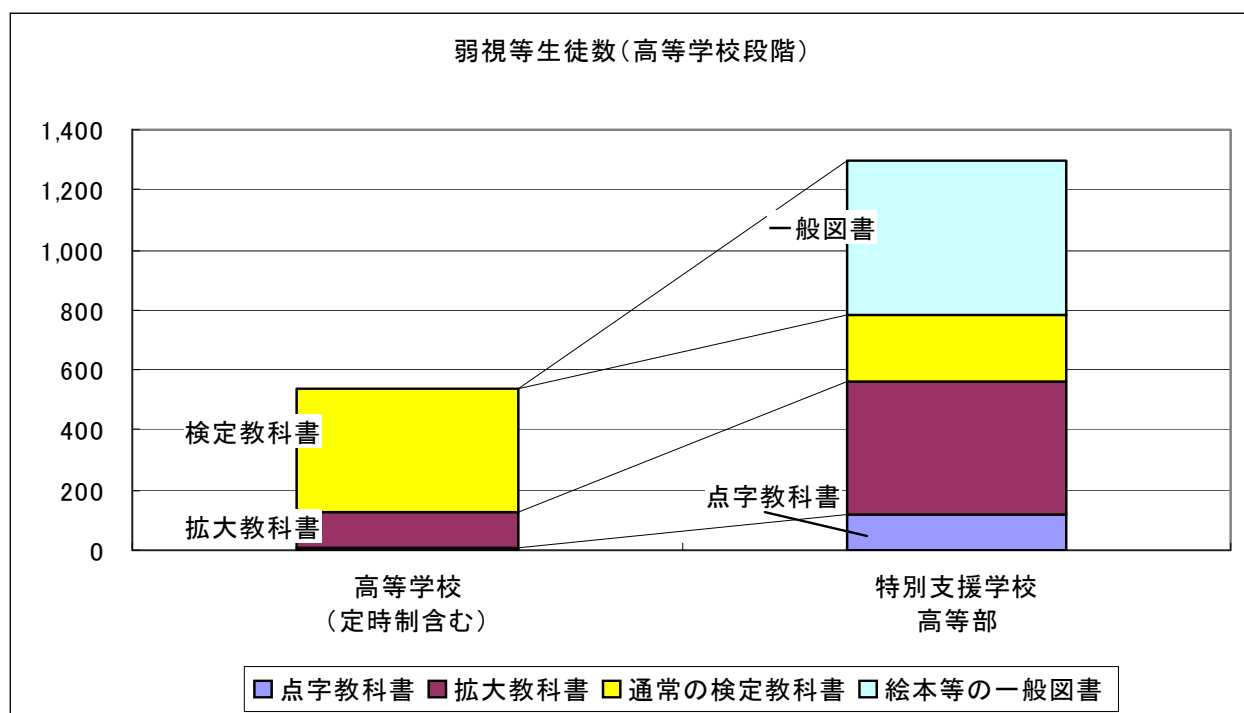
(4) 高等学校段階

[表 4]

在籍	弱視等 生徒数	学校として主に使用することが望ましいと 判断している教科書の種別			
		点字教科書	拡大教科書	通常の 検定教科書	絵本等の 一般図書
高等学校（定時制含む）	538	8 (1.5)	118 (21.9)	412 (76.6)	- (-)
中等教育学校・後期課程	2	0 (0)	0 (0)	2 (100.0)	- (-)
特別支援学校・高等部	1,295	116 (9.0)	444 (34.3)	227 (17.5)	508 (39.2)
合計	1,835	124 (6.8)	562 (30.6)	641 (34.9)	508 (27.7)

※ ()は在籍ごとの弱視等生徒数に対する割合。四捨五入の関係で合計が 100 にならない場合がある。

[図 4]



- ・ 高等学校に在籍する弱視等生徒のうち 2 割程度、特別支援学校高等部に在籍する弱視等生徒のうち 3 割程度は拡大教科書の使用が望ましい生徒である。
- ・ 特別支援学校高等部に在籍する弱視等生徒のうち 1 割程度は点字教科書の使用が望ましい生徒である。

○ 点字教科書・拡大教科書を使用していない主な理由

児童生徒の障害の状態等から、学校として点字教科書・拡大教科書を使用することが望ましいと判断しつつも、実際には使用させていない場合に、その理由を自由記述で求めた。（「教科書会社やボランティア団体から点字教科書・拡大教科書が発行されておらず入手できないため」を除く。）

（点字教科書・拡大教科書共通）

- ・ 本人・保護者が使用を希望していないため
- ・ 入学・転入の際、障害の状態を把握できなかったため
- ・ 教科書を入手する手続きが分からなかったため

（拡大教科書）

- ・ 拡大教科書の存在を知らなかった、又は拡大教科書が発行されているかどうか分からなかったため
- ・ 特定の教科は通常の検定教科書でも対応が可能であるため
- ・ 拡大鏡・拡大読書器を使用しており、検定教科書でも対応が可能であるため
- ・ 拡大コピーで対応が可能であるため
- ・ 拡大教科書は通常の教科書とページや作りが違い使いにくいいため
- ・ 拡大教科書は重くて持ち運びに適さないため

（点字教科書）

- ・ 本人が点字使用の指導を受けていないため

※ 「本人・保護者が使用を希望していないため」という回答は、小学校・中学校段階に多かった。

※ 「教科書を入手する手続きが分からなかったため」、「拡大教科書の存在を知らなかった、又は拡大教科書が発行されているかどうか分からなかったため」、「拡大鏡・拡大読書器を使用しており、検定教科書でも対応が可能であるため」、「拡大コピーで対応が可能であるため」という回答は、高等学校段階に多かった。